[制作記録]

九谷焼によるインスタレーション表現

高　橋　治　希

眼前の風景は現実でありながら、記憶の中で何度も反芻した風景に組み込まれる時、心象の中で精錬され新たな風景に生まれ変わる。それは自己の世界観によって、眼前の風景が変換され、他の記憶の風景と新たな関係を結び出すということである。

私は風景とは個人的なものであると同時に感性そのものであると考え、近年そうした風景の様を成長する木々の花や葉に滲むことに例えて表現している。

素材観

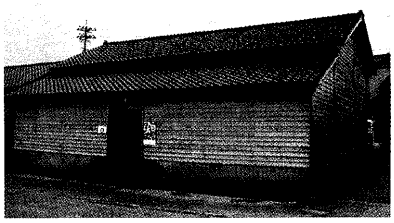
私は九谷焼に強くも儚い二つの相反する印象と、薄く形作ることや釉薬の透明感に瑞々しさを感じている。そうした素材感に自分の反芻して作られ続ける風景や生命観を重ね合わせることは、私の風景に対する感覚がよりリアルに形付けられると考えている。

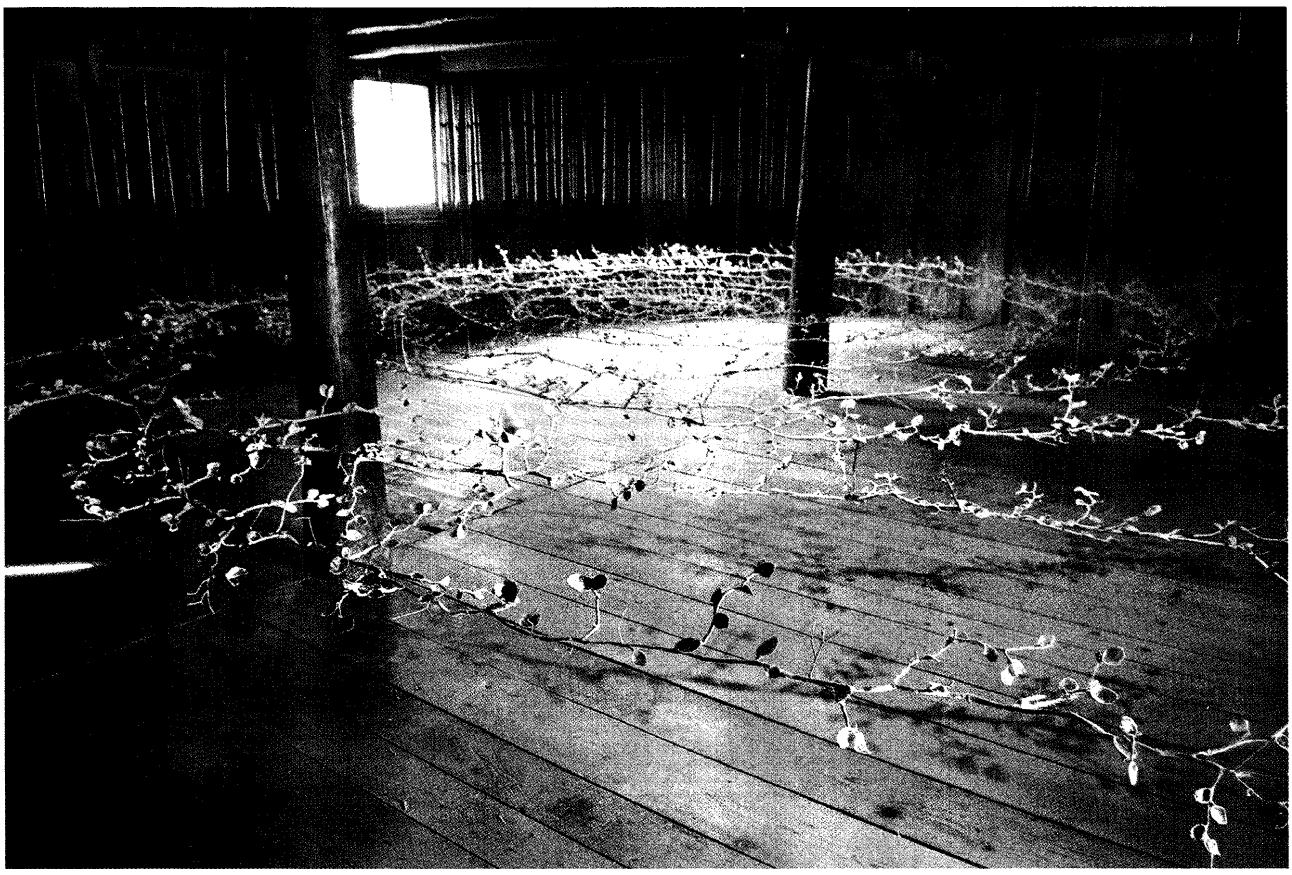
場との対話

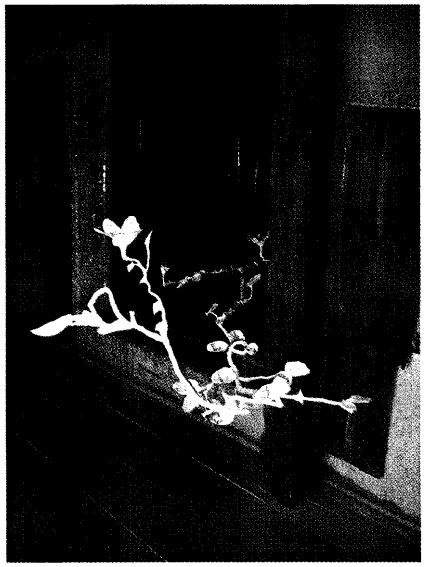
インスタレーション作品を設置することはその場の意味を自分自身に問いかけると同時に、時間の経過と空間の広がりを擬似的でも変化させ、持ち込んだモノとの関係性から、自分の空間と時間の舞台を構築し、世界観を立ち上がらせなければならないと考えている。

今回の展示では、高さ７０ｃｍに新たな自由曲線の面をつくり、中心に向かうに従って小さく細くなる葉や蔓はその楕円の効果も手伝って、空間が中心に向かってゆがんでいく（広がっていく）ことを感じ取れるようにした。その浮遊間と磁器は緊張関係でありながら形体を植物にすることで、緊張感をしなやかなものに変え、その動きの中に散りばめられた風景の断片が鑑賞者の体内を爽快に通過するような感覚、言うなれば私の風景の断片に鑑賞者が取り込まれていくような感覚を作り出した。そうした、個人の内に潜む風景をその場の状況に編み込みながら、新たな風景を生み出す作品を今後も制作していきたいと考えている。

（たかはし・はるき　油画）







２００７年８月から９月に行われた富山県氷見市で行われたサスティナブルアートプロジェクト「ヒミング」での蔵再生プロジェクトの風景。古く使われなくなった港の番屋に九谷焼による草木の連関の作品を展示した。

Photo　守田　直美